

共遊の時間

足利市立助戸小学校

1. はじめに

本校では昭和47年48年の2年間、子どもと教師が共に遊ぶ「共遊の時間」をもうけて実践してきた。共遊時間を設定したのは、本校の学校教育目標の年度の重点である児童指導の充実強化をはかるためである。それにはまず教師自身が児童を正しく理解しなければならないということで、客観的な理解と、共感的な理解の方法を考えた。

さて、客観的な理解の方法はいろいろあるが、本校ではソシオメトリックテストを実施することにした。これは、児童相互の人間関係を学級集団における好き、嫌い、誘引と反発、親和と排斥によってとらえ、それによって描かれた集団構造を究明していこうとした。

また、共感的な理解については、「共遊の時間」を設定し、子どもと子ども、子どもと教師が無心になって遊ぶことによって、感情の交流が自然に、かつ豊かにおこなわれるのではないかという視点にたった。

子どもと教師が遊ぶということは至極あたりまえのことである。しかし、本校が教育目標の具体策として、意図的、継続的に実践してきたということで、ささやかな記録であるが敢えて、まとめてみた。

2. 教育過程における「共遊時間」の位置づけ

(1) 子どもの遊びをどうとらえたか

遊びは、子どもの身体的な発達や気力を養ううえで、大きな役割をはたす学習の機会や素材を提供する。技術的な興味や才能の芽を育てる。また、社会性の伸長や道徳的発達をうながすなどの意味を見いだすことができる。

「市研究所報」第22号では、遊びの原理として、休養説、エネルギー説、過剰説、自己表現説などを紹介している。

本校では、先に述べたとおり、ソシオメトリックテストの結果描かれた集団構造で、孤立児、周辺児、スターや、集団の面での分裂型、対立抗争型、性別型などをよりのぞましい学級集団へ導くことがねらいである。したがって遊びを集団遊びとしてとらえようとしている。

ア、いっしょに遊ぶ——楽しさ——共感（クラスへの所属感、安定感）

イ、いっしょに遊ぶ——一方的自己主張はだめ——みんなの意見をきく（協調性）

ウ、いっしょに遊ぶ——ずるはできない——ルールを守る（フェアな態度）

(2) 共遊時間の位置づけ

「市研究所報」第5の「休み時間と子どもの遊び」の中に、教師は子どもと遊ぶ時間もないし、遊ぶ気持ちも弱い……。ということが述べられている。はたして本当に遊ぶ気持ちが弱いのであ

ろうか。本校では、遊びの教育的な意味は認めるが、むしろ遊ぶ時間がとれないという方が多いようである。たしかに現在の学校の過密にくまれているダイヤでは時間はとれない。しかし、教師が遊ぶ気持ちがあるとなれば、遊べるような時間をうみ出すための学校教育計画を立てなければならない。

そこで本校では、授業時数の弾力的な運用をはかり、1校時を40分とし、5分間の短縮時間をまとめて、共遊時間を20分間とった。したがって、この共遊時間は、清掃指導や給食指導の時間と同様に明確に位置づけられているのであるから、児童も教師も全員参加することにした。

例 日課表 (前期)

8:35

(20分)

1校時	2校時	休憩	3校時	4校時	給食	休憩	共遊	5校時	6校時
-----	-----	----	-----	-----	----	----	----	-----	-----

(3) 共遊の内容と施設

低学年の子どもが、砂場やブランコ、タイヤなどで遊んでいる様子を観察してみると、空間的には、近寄って遊んでいるよう見えても、実はばらばらに遊んでいる。これを平行遊びといって、さらに学年が進むにつれて、集団の人数も増加して、いわゆる連合遊びや協同遊びへと発展していく。ところが、「現代子は遊びを知らない」といわれているとおり、学年が進んでも、遊びの集団はあまり変化を示さない場合が多い。これはなんといっても、子どもの、のぞましい遊びの姿とはいえない。そこで遊びの指導も必要となってくる。

本校では、中学年、高学年は、それぞれ学級を単位として、最も簡単で、しかも多くの児童が参加できるドッチボールやポートボールなどを扱うことにした。

しかし、全校で同時展開のため、場所が当然問題になる。そこでドッチボールとポートボールの兼用コートで、ナイロンロープで18学級分作った。これがあれば、休み時にすぐできるので便利である。またボールも常時(放課後、土、日曜日も)校庭に用意しておくようにした。

3. 共遊時間の実態

(1) 子どもたちからみた共遊時間

ア 2年発問 「昼休み時間先生とみんなで遊ぶことは好きですか、きらいですか」

Y児の場合

- おもしろいからです。
- あたらしいあそびがふえてくるからです。
- みんなといっしょに遊べるからです。
- 先生がいるとおもしろいからです。
- たのしいからです。
- 元気がでるからです。
- たすけあうからです。
- けんかをしないようになったからです。
- ともだちになれるからです。
- からだにいいからです。
- 体いくのべんきょうになるからです。

イ 6年 間 「共遊時間について気のついたことをかきなさい」

○児の場合

- ひとりあそびよりみんなと遊んだ方がたのしい。
- 学級全体がだんだんまとまってきた。
- なかまはずれがいなくなった。
- みんなが、先生と友だちになれる。
- 学校にくるのがたのしくなる。
- みんなと、へいきで話すことができる。
- みんなで遊べば、1人や2人で遊んでいる人がいなくなる。
- みんななかよくなる。
- いままで、仲間はずれになっていた子もみんなにさそわれて、仲間はずれがいなくなる。
- 男女がなかよくなった。

ウ 2年上記アンケートの学級全体

- みんなとたのしくあそべる。 (25)
- なかよくあそべる。 (20)
- みんなと、ともだちになれる。(5)
- たすけあいができる。 (3)
- 先生とあそべてたのしい。 (3)
- みんなと、おなじあそびができる。 (3)
- 友だちがふえた。 (2)
- ひとりだとつまらない。 (1)
- からだがじょうぶになる。 (1)
- 学校にくるのがたのしい。 (1)

エ 6年上記アンケートの学級全体

- みんな楽しくあそべる。 (26)
- 学校がだんだんまとまってきた。(34)
- なかまはずれがなくなってきた。(31)
- なかのよくなかった人とも仲よしになれた。 (19)
- 男女がなかよくなってきた。(12)
- 先生との結びつきが深まる。(9)
- 友達の性格がわかった。(4)
- 大勢で遊ぶ楽しさをした。(2)
- かなしいことなど忘れる。(1)
- 学校全体のふんいきがかわった。(1)

※ ()内数字は子どもが応答した数

学年のいくつかのクラスについて児童のアンケートを取ったが紙面の都合で上記2年、6年のあるクラスのみを掲載した。2年Y児については、やはり2年生なりに「おもしろい」「たのしい」、ということが素直に述べられている。また、「みんなといっしょにあそべるから…」、「友だちになれる。」「たすけあうから…」などは、2年生としての集団遊びの初歩的段階を経験している表われであると思う。さらに、「あたらしいあそびが、ふえてくるから」ということは、子どもなりに遊びの変化ということに気づいている。

6年○児の場合は、単純に自分個人の楽しさでなく、「学級全体がだんだんまとまってきた」「なかまはずれがなくなった。」など、集団をとおしての人間関係について述べている。

次に学級全体としてみた(ウ)の2年、6年の場合をみると、2年生は集団といっても初歩的な段階であるが、6年生は、さすがに、孤立児がなくなる、周辺児が遊びに参加して来る。学級集団としての分裂や対立、性別による離反等がなくなっていく過程がとらえられており、集団遊びのねらいが、だんだん達成されているのではないかと思う。とくに、「友だちの性格がわかった」、「大勢で遊ぶ楽しさをした」などは、遊びをとおして、対人関係を知的にとらえようとしている点は、かなり高度な考えである。

(2) 教師の共遊時間の実践例 (Bクラスの場合)

ア 指導のねらい

(1)子どもと教師の心の結びつきを深める。(2) 子どもに遊びの種類とその遊びの方法を指導する。(3) 子どもの創造性を育てる三つの柱を立てた。1カ月間、遊んでみたが、教師がだした遊びに、子どもを引き入れることは、低学年ではかなりむずかしいことがわかった。子どもが自主的に参加することが少なく、また趣味も持続しない。従って教師の方でも、平易な遊びをえらぶ結果になる。

そこで、学級会の時間に「昼休みの時間をどうすごすか」というテーマで、子どもたちと話し合った。その結果、遊びの種類をきめるのは、その日の日直がきめることになった。そして日直は遊びの種類、内容、方法やルールについて考え、毎朝始業前に背面黒板に記入することにした。さらに給食時間に、これを発表し同意を得ることにした。なお決定されると用具の準備なども一切日直の責任とした。

イ 実施してきた遊びの種類

(校庭)

- ドッチボール
- 片足ずもう
- よういドン
- (せんとうかいし)
- 押出しずもう
- 障害物リレー
- ボールリレー

- 場所とりおに
- ハンカチおとし
- ロンドン橋おちた
- 人とり
- ゴム段とび
- なわとび
- ねずみとねこ

(室内)

- 拍手のとびら
- ハンカチおとし
- ジャンケンゲーム
- 福笑い
- しりとり歌合戦
- 伝言板
- すきか きらいか

ウ 児童の声

A児 「もしみんなでかわりばんこでなかった
なら、わたしがやるとけんかになる」

B児 「だれもがやりたいあそびが1回はでき
る」

C児 「いつもおなじ人がやると、おなじ遊び
しかできない」

D児 「とうばんがきめるとけんかがない」

E児 「しらなかった遊びもできる」

F児 「にっちよくのとき、黒板に字がか
ける」

G児 「みんなの前で発表できる」

エ 児童の作文

K児の場合

わたしは、ひるやすみのあそびを、とう番が、きめるようになってから、しらないあそびが、おぼえられるようになりました。それから、わたしは、友だちがあまり、いなかったのに、友だちが、たくさん、できるように、なりました。もう10人ぐらいできました。これからも、もっといいあそびを、かんがえたり、友だちをたくさん、つくっていきたく、おもいます。いちばんあそぶあそびは、ドッチボールやリレーです。これからも、あまりおなじあそびじゃなくて、ちがうあそびをしたいとおもいます。

S児の場合

ひるやすみに、あそんでいると、いろいろなことが、わかります。それなので、もっと、もっと、いろいろな、あそびがあると、おもって、自分で考えてみました。わたしが考えた、あそびは、はじめは、雨の日にやるあそびです。かみや黒板などに、目をつぶって、左手で自分のかおを、かいてみる。そして、晴れの日には、2人ずつくんで、ジャンケンをして、かった人は、かった人どうし、まけた人は、まけた人どうしで、また2人ずつくんで、ジャンケンをして、かった方のチャンピオンはそのまま、まけた方のチャンピオンは歌を歌う。わたしは、そういうあそびもあるとおもいました。わたしは、じぶんで、あそびを、どんどんつくりたいと思います。

オ 指導にあたって

上記の子どもの声や、作文によって、次のことが考えられる。

- 日直制で毎日交たいで遊びが実施できるので、どの子どもも、遊びを考え、発表し、実践するという機会が平等に与えられる。
- 遊びによっては、個人的には不満のあるものもあるが、ある程度のところで納得し、遊んでいるうちに、次回のイメージが浮かんでくる。
- ドッチボールの場合、女子や、球に弱い子が、強い子の球を取った時、みんなとほめてやる。また、反対に強い球にあたった時は泣きだしそうになるので、そんな場合にはいたわってやる。なんとなく、なごやかな雰囲気、じょう成される。
- 学級のポスの存在は、影をひそめて、だれでも、自由に発表できる。
- 遊びのくふうをすることが多いので、学習面でもくふうがみられる。
- 教師と児童、児童と児童の結びつきが深まり、学級の雰囲気づくりに効果があがった。

これらの事から、毎日をただ遊ぶだけに費すのではなく、より楽しく、より心の結びつきを深くするためには、やはり計画から実施、反省までを児童が、やれるようにすることが大切である。そして教師もクラスの一員として、共に相談したり指導をすることが効果をもたらすものであると思う。以前に高学年担任の時実施した経験からすると、低学年では無理な点があると思ったが、実際に実施してみると、むしろ低学年で実施した方が効果が多かったと思っている。共遊の時間として、全校で実施していることがよかったのかも知れない。

(3) 共遊の時間と児童会活動

さらに48年度は、児童会の体育部主催の学級対抗球技大会も実施した。それは、子どもたちが、自分の学級集団だけでは満足せず、他の友だちと力ためしをしたいとの声があったからである。秋にはポートボール大会を一週間かかって実施した。予告を早くしておく、それぞれの学級で練習計画をたてて事前の練習をする。20分間で一試合しかできないが、これが一週間続けられるところに意味がある。また同様に、6年生を送るための、送別球技大会もこの時間に実施した。これは4年以上6年まで各クラスでチームをつくり、トーナメント戦で実施した。決勝には、4年3組と6年2組が進出し、熱戦のすえ、4年3組が優勝するという番くるわせの結果になった。あらに教師も共にということで、優勝した4年3組と教師で対戦した。学校中の子

どもが、両チームに別れての応援となり、短い20分間ではあったが、校庭はわれんばかりの歓声につつまれた。

こうして短い共遊の時間ではあるが、子どもに、はっきりした目標をもたせて実施すれば子どもたちは、進んで参加するものである。また学校行事や、児童会行事も共遊の時間に実施することによって、教科の時間が予定通り確保できる。

4. 教師からみた共遊時間

「共遊時間を設定して2年間実施してきましたが、時間のとり方や内容、そのあり方などについて、改善点や意見がありますか」

- のびのびと遊べて良い。
- クラスの実態に即した、特色ある内容が考えられるべきだ。
- 共遊時間のとり方は適切である。
- 多面的（歌、合奏、児童集会等）に実践していくとよい。
- 週1度は全校児童が一緒にやれるものを児童会などで計画したらよい。
- まじめに共遊時間をすごすと、5校時に影響する。
- 学校全体で実施することに意義がある。
- 子どもに計画、実施、反省をさせるような共遊にしたい。
- 教科指導の時間を5分ずつ共遊時間にあてているのだから、大切にあつかう方法を考えなければならない。
- 共遊時間を行って、1年間になりますが、体のぐあいが悪かったり、仕事がたくさんあったり、集金を整理したりする時間が多いときは、ちょっと時間をもったいない様に思いますが、以上のことは、私自身の問題ですから、子どもがわから思えば、授業中に、しかられた気持ち、くじけてしまうような気持ちを与えた後、一緒に遊ぶことによって私自身の気持ちを、その子に伝えることができると思う。また、あまり目立たない子どもにも接することができる。

共遊でなにが得られるか、という問題については、「何が」という答えはでないように思う。でも「何かが」得られるように思う。ドッチボールをする。ボールをパスする。そのボールに糸がついている様に、私の投げたボールは、子どもの心に結びついていくように思われるし、子どもからのボールは、やっぱり私の心に糸を結んでいきます。

5. おわりに

「子どもたちの教育は、まず子どもにきけ」とある人がいった。これは平凡な言葉であるが、意味のある言葉である。なぜならば、現在の学校教育は、子ども不在の教育がおこなわれているのではないかという声に対する、学校や教師への警鐘であるからである。

共遊の時間は、前述のとおり子どもたちは、喜んで、参加している。また日々の実施している実態をみても、子どもたちは、昼休みになると、職員室に呼びに来る。なにかの事情でおくれようものなら大ききわぎ、こんどは集団で強引に誘い出すほどである。

「共感的な理解の過程は、非言語的、前言語的な過程である。それは、ちょうど無心の幼児の気持ちを母親が敏感に感じとるがごとく、そこには、感情の交通が自然に、しかも豊かにおこなわれる」

(学校教育全書5)と述べている。

わたくしたちは、教師が、子どもたちと、ほんとうに無心になって、遊んでいる時、この母親に
にた、なにものかを感じ得ることができるのではないかと思う。実際にまとめてみるとほんとうに、
ありきたりの実に幼稚な記録になってしまった。

今後の課題としては、共遊の時間をとおして、学級の集団構造がいかに変移していくかを正確にと
とらえていくようにしたい。子どもは、ひとときもやすむ事なく、つねに変化している存在である。
わたくしたち教師は、その変化に対応していくための、あらゆる方策と、努力を惜んではならない。

(記 岡田)

<参考文献>

- 「教育学全集12」小学館
- 「学校教育全書5」全国教育図書KK
- 「初等教育資料8月号」文部省
- 「指導のための資料」№5 市教育研究所
- 「教育研究所報第22号」市教育研究所

評

「共遊」が問題になり数年を経過し、足利市内の小中学校でもその実践に努めている学校も少
なくない。この時において助戸小の実践記録が発表されたことは意義あることである。

助戸小の「共遊」は、学校教育の中でどのように子どもの遊びを考え、教育過程の中に子ども
の遊びをどう位置づけ、それに教師がどのようにかかわりあったかという点が明確に示されてい
る。さらに「共遊」をただ実践するという段階にとどまらず実験的に、継続的に研究を進めたと
ころに価値がある。具体的には、子どもの遊びの中心が「スポーツ的遊び」であることに着目し、
それにあわせて施設の充実を図るなど参考になることである。今後の課題としては、本来自由で
あり、無目的である「遊び」と、学校教育で計画する「共遊」の概念を明確にし、さらに研究を
進められることを期待する。